

俳優の、藤竜也に憧れていた。

ドラマの中で、無造作に啜えたタバコにジッポライターで格好良く火を点ける。そのタバコの銘柄を、藤竜也の事務所に電話をかけてまで、調べた。パーラメント。

当時、まだその辺のタバコ屋には置いていなかったソレを探して、かなり遠方の店まで行き、買い溜めしていたものだ。

高校を卒業していたとはいえ、未成年である。当時、一人暮らしだった私の経済状態では、買い溜めも三つくらいが精々だった。

ジッポライターで火を点け、悦には入る。格好良いと思っていた。

タバコの吸い方など知らず、口に煙を溜め、鼻で空気を吸い込んで、口から細かい煙を吐く。つまり、当人は吸っているつもりでいたが、実はふかしていただけなのである。

喫煙量も、一日精々五本くらいだった。人前で、格好を付けて吸うくらいで、一人の時など、タバコの事も忘れていたくらいだ。

二十歳の時、一度タバコを止めた。当時の彼女にタバコを止めさせる為に、自分も付き合ったのだ。

簡単に、止められた。元々、吸っているつもりで、ふかしていただけなので、当たり前だ。当然、幻覚症状などでなかった。

「意思が、強いよね」

そう言われる事が快感で、色んな知り合いに、得意げに禁煙の理由を話したものだ。

その後その彼女と別れ、再びタバコを始めた。勿論、パーラメントだ。そして、今度は吸い込む事も覚えた。

タバコを吸ってクラクラする感覚を、初めて知った。吐き出す煙の濃度が、以前より薄くなっているのに気付いた。次第に、本数が増えていった。一日一箱～二箱。いつの間にか、立派なヘビースモーカーになっていた。

やがて、結婚して子供が三人出来た。長女は、生まれ付きの小児喘息。

「子供の為に、タバコを止めて」

再三に渡り妻に言われたが、私はタバコを止める気には全くならなかった。

子供の為なら、家にいる時は台所の換気扇の下で吸えばいいと思っていた。

タバコを吸わなくても、癌になる奴はなるし、吸っていてもならない奴はならない。そう思っていた。止めろと言う妻も、『子供の為』と言うばかりで、私の身体の為とはあまり言わなかった。

そんな私がタバコを止める事になったキッカケは、ある日の夜、突然やってきた。

いつものように、台所でタバコを吸っていた私に、突然妻が詰め寄ってきた。身体に悪いから、タバコか酒のどちらかを止めて欲しいと言うのだ。言い方は思い詰めた様子で、とても誤魔化せる雰囲気ではなかった。

「じゃあ、酒を止める」

私の言葉に、妻は涙をこぼした。私はギョツとした。妻の要求には、応えたつもりだ。しかし、妻の口からは私が想像もしていなかった言葉が出てきたのだ。

「これだけは言いたく無かったけど、昔付き合っていたあの人の為にタバコを止めたのに私の為には止めてくれないのね」

二十年近くも昔の話だ。当時知り合いだった妻に、それを話していた事さえ忘れていた。

言いたくなかったに違いない。自分は妻に対し、酷いことをしていたと思った。私は、吸っていたタバコを灰皿でもみ消し、新しいパーラメントを無造作に啜えた。

「これを、最後の一本にするよ」

十八年前に妻にもらった、銀張りのジッポーライターで、格好良く火を点けた。藤竜也のように。

それから三年が過ぎようとしている。今では、すっかりタバコの事など忘れていている。小遣いも余り、朝の時間に余裕も出来た。

私の禁煙方法は、自分が懲役に入ったと思うか、この世からタバコが無くなったと思う事にしてすっぱりと止めるという、シンプルなものだ。

「いくら吸いたくなくても、俺は絶対吸わないんだから、吸いたくなるだけ無駄だ」

と、常に考えた。タバコの代わりにガムだの飴だのは、未練を残して余計に後を引く。

ただ、今回は起こった、幻覚症状。一瞬モノが二重に見えたり、脂汗が出た

り、ハッと気付くと何分もボーッとしていたり。

ソレを抑えるために、タバコを吸う格好を真似て、歯を閉じたまま『シーツ』と鋭く、肺に刺激を与えるまで空気を吸い込み、それを煙を吐き出すように吐く。何度か繰り返すと、模擬喫煙となるのか、かなり落ち着いた。

三ヶ月我慢すれば、その症状が頻発することもなくなり、一年を越えると殆ど出なくなった。禁煙成功だ。

それから、禁煙するなら、人に宣言する事をお勧めする。やはり禁煙する上で一番力になってくれたのは、例の一言だったからだ。

「意思が、強いね」